都市経営　No.6（2014），pp.11-28

アイン・ランドのアメリカ保守主義批判

藤　森　かよこ

要旨

『肩をすくめるアトラス』（1957年）に対する保守主義言論界から放たれた悪意に満ちた書評に応えて，アメリカの保守主義者たちの思想の矛盾と哲学的立脚点の曖昧さに対するアイン・ランドの攻撃が始まった．アイン・ランドとアメリカ保守主義の対立は決定的になった．

以下のようにアイン・ランドは主張した．保守主義者たちは，建国の理念を寿ぐ．しかし，建国の理念が必然的に導き出す政治経済体制であるところの資本主義を明確に支持しないのは，なぜか．彼女の定義による資本主義とは，長期的視野に基づいた合理的自己利益を実現したい個人が，そのような個人と，各自の労働による生産物を，互恵的に交換することである．資本主義の弊害は，資本主義の過剰から起きるのではなく，資本主義の欠如から起きる．道徳としての資本主義を理解しない保守主義者たちは，利他主義の道徳を市民に強制する国家主義（リベラル）に敗北するしかない．さらに彼らは，アメリカが伝統を打破して建国されたことを忘れている．伝統を守ると言いつつ，現状維持したいだけである．また，アメリカの保守主義者が，家族を過度に重視するのは，一種の部族主義，集団主義である．個人の独立と自由を守るべく王制を否定し，共和国を史上初めて立ち上げたアメリカ建国の祖（Founding Fathers）は，人間の知力，理性以外に頼るものはなかった．しかし，現代の保守主義者は，人間の理性の力を認めず，政教分離したはずのアメリカで宗教を奉じ，神の存在に疑問を持つ知性の自由を恐れる．

キーワード：アメリカ保守主義，客観主義，資本主義，設計主義，国家主義

1　はじめに

本論の目的は，アイン・ランド（Ayn Rand:1905-82）の政治意識が，「客観主義」（Objectivism）と彼女が名づけたところの思想にまで分節化される経緯を明らかにすることにある．筆者の最終的な目的は，アメリカの政治思想史におけるアイン・ランドの布置を明らかにすると同時に，日本人にとってのアイン・ランドの意義を提示することにある．そのための作業のひとつとして，アメリカの保守主義とアイン・ランドの思想の差異，およびリバータリアニズムと彼女の思想の差異を整理・確認する必要がある．

まず，アメリカの保守主義がどういうものであるかを確認し，それがアイン・ランドといかに交差するものであったかを明示しなければならなかった．その作業は，拙論「アメリカにおける保守主義の誕生とアイン・ランドの交点」（藤森，2012）においてなされた．この論文はアメリカの保守主義言論界にアイン・ランドが受容された背景と経緯を記述している．

ただし，この論文においては，ローズヴェルト政権のニュー・ディール政策に対するアメリカの「反動的勢力」が，フリードリッヒ・A・フォン・ハイエク（Friedrich A. von Hayek:1899-1992）の『隷従への道』（*The Road to Serfdom,*1944）によって，「アメリカの保守主義」（American Conservatism）という思想を獲得するまでが述べられたが，ハイエクの思想そのものについての確認は不十分であった．それを補足するものとして，「衝動から思想へ---アメ

リカ保守主義の誕生とハイエク『隷属への道』」（藤森，2013b）が書かれた．

次に，アイン・ランドが自己の思想「客観主義」とアメリカの保守主義なるものが似て非なるものであることを思い知る契機となった『肩をすくめるアトラス』（*Atlas Shrugged,*1957）の内容と思想を明らかにする論文「アイン・ランドの思想と『肩をすくめるアトラス』」（藤森，2013a）が書かれた．これは，『都市経営』第４号に収録されている．

本論では，いよいよ，アイン・ランドの思想とアメリカの保守主義の齟齬の様相を明示する．

2　初期アイン・ランドの政治意識

アイン・ランドは，社会主義や共産主義を憎むことから，自らの政治思想を育むことを始めた．帝政ロシアのブルジョワ家庭に生まれたユダヤ人として幼小時代を過ごし，革命後は実家の没落と貧困を経験し，共産党政権の統制，抑圧，自由剥奪に苦しんだのであるから，当然であった．主専攻として歴史を，副専攻として哲学を選んだペテログラード大学（現サンクトペテルブルク大学）在学中も，共産党政権の批判をしたということで退学になる学生のリストに入れられていたほどだ（Heller, 2009：47）．だからこそ，長女の将来を案じた母親の尽力により，アイン・ランドは，アメリカはシカゴに移住した母方の親類を頼り，半年間のビザを得てアメリカに渡り，そのままソ連には戻らなかった．

1930年代や40年代前半のアメリカの知的潮流は，社会主義や共産主義に傾倒するものだった．ローズヴェルト政権による設計主義や統制経済や集産主義に依拠したニュー・ディール政策が高く評価されていた時代であった．ソ連の実情を知っていたアイン・ランドには，苛立たしい状況であった．だからこそ，シナリオ・ライターとして，作家として立つための苦労，経済的な苦労のかたわら，経済学や政治理論についても学んだ．

ところが，1932年の時点においては，民主党のフランクリン・デラノ・ローズヴェルト（Franklin Delano Roosevelt:1882-1945）に投票したほど，アイン・ランドは,政治的にはナイーヴであった（Merrill,1991：127）．ただし，1940年の時点では，ローズヴェルトのニュー・ディール政策に反対したウェンデル・ウィルキー（Wendell Willkie:1892-1944）の熱狂的支援者となり，フルタイムの選挙運動員になったほどには，彼女の政治意識は成長していた（Heller, 2009：132）．

ウイルキーは，ローズヴェルト大統領と同じく民主党員であったが，ローズヴェルト政権が進める大規模な公共事業に反対した．ウイルキーは，政府が市場経済に介入すると，政府が肥大し，結果的に民主主義が侵されることになり，市民の自由が失われると危惧を抱き，共和党員になった．彼は，三選をねらうローズヴェルト大統領に戦いを挑み，共和党の大統領候補の指名を獲得する選挙戦において，ついに共和党の指名を勝ち取った．

アイン・ランドと夫のフランク・オコーナー（Frank O’Connor: 1897-1979）は，ウイルキーこそ，資本主義と伝統的アメリカの自由の守護者だと考えたからこそ，フルタイムのボランティアとして何カ月もの間，ウイルキーの選挙戦に参加した．最初はタイピストとして参加していたランドは，その有能さを，すぐに認められた．プロパガンダ要員に任命され，ローズヴェルト大統領に反対する議論集会「知的弾薬局」（intellectual ammunition bureau）を立ち上げた．いつまでも残る強いロシア語なまりの英語で，公衆の前でウイルキー支持の演説をするまでになった（Heller, 2009：132-33）．

ところが，ウイルキーは，共和党から指名を受けたとたん，どんどん妥協を重ねた．ついには，ローズヴェルト大統領が目論むヨーロッパで起きている戦争への参戦や，徴兵制を支持するまでになった．ヨーロッパの戦争にアメリカが参戦するということは，アメリカには何の利益もないと，アイン・ランドは考えた．それは憎いソ連に利する行為でもあった．とはいえ，ランドは，最後までウイルキーの選挙戦から離脱はしなかった．しかし，ウイルキーには幻滅した．

大統領選におけるウイルキーの度重なる妥協は，支持者の疑惑を招き，ウイルキーは敗北した．結果

として，ウイルキーは，ローズヴェルト政権の政策を強化してしまった．アメリカの参戦により，第二次世界大戦は連合国側の勝利に終わったのではあるが，その結果，ヒトラーよりも悪質な，「核武装したソ連」という脅威にアメリカはさらされることになった（Merrill,1991：129）．

この時点で，すでにアイン・ランドには，「アメリカの保守主義」と「アメリカの保守主義者たち」への疑惑が生じていた．「アメリカの保守主義」と「アメリカの保守主義者たち」の思想的脆弱さや曖昧さを，このとき彼女は知った．その疑惑が，思想的に明確に言語化されるのは，1957年の『肩をすくめるアトラス』発表後のことだった．これについては，後で詳しく述べるので，ここでは示唆するだけにとどめておく．

ウイルキーの選挙戦に参加したことはアイン・ランドを幻滅させはしたが，収穫もあった．選挙戦を通して，信条を同じくする（と，その時点において彼女が思った）知識人たちに出会うことができたからだった．その知識人たちの中には，アルバート・Ｊ・ノック（Albert J.Nock:1870?-1944 ）がいた．イザベル・パタソン（Isabel Paterson: 1886-1961）がいた．ローズ・ワイルダー・レイン（Rose Wilder Lane:1886-1968）もいた．

アルバート・Ｊ・ノックとは，20世紀初めに，リバータリアニズム（Libertarianism）を提唱した人物である．後にリバータリアン（Libertarian）と呼ばれる人々から，先駆者として讃えられた（Sunwall, 2007：17-35）．イザベル・パタソンはカナダ系アメリカ人女性作家＆思想家であった．アイン・ランドの思想のかなりの部分は，イザベル・パタソンから学んだと言われるほど，パタソンはアイン・ランドに影響を与えた（Heller, 2009：134-37）．正規に受けた教育は小学校だけであった独学の人物ながら，パタソンはリバータリアニズムの基本図書として今でもアメリカでは読まれ続けている自由主義に関する政治思想書『機械の神』（*The God of the Machine,*1943）の著者である．ローズ・ワイルダー・レインは，ジャーナリストとして活躍し，彼女もまた，パタソンと同じく，アメリカのリバータリアニズムの先駆者のひとりであった．日本でも愛読者の多い児童文学『大草原の小さな家』（*A Little House on the Prairie,* 1932-1943）シリーズは，独立自営農民であった両親の生き方を描き，独立自尊の自由主義を提唱，賛美するリバータリアン文学の古典である．

3 『肩をすくめるアトラス』発表前のアイン・ランドの政治的状況

前述したように，ウェンデル・ウィルキーの選挙運動にフルタイムで参加することによって，アイン・ランドは，当時の保守系知識人やアメリカのリバータリアン運動の先駆者たちの多くと友人になる契機を得た．もちろん，それは，1940年時点において，彼女個人が，駆け出しの作家として，ささやかではあるが，ある程度の認知度を獲得していたからでもあった．

当時は，アイン・ランドは，『一月十六日の夜』（*The Night of January 16th,* 1936）という戯曲をハリウッドで成功させ，ブロードウェイでの上演も成功させ，アメリカのあちこちでの上演権料を獲得した後だった．その貯えがあったので，何カ月も賃労働に従事せずにフルタイムでウィルキーの選挙戦に参加できた．

『一月十六日の夜』は，法廷劇であり，観客から12名の陪審員が選ばれ，彼らや彼女たちが実際に評決をくだす．つまり劇の最後は決まっていない．検察側と被告側が，それぞれに提出する証拠の質と量は均衡しているので，評決を決定するのは，もっぱら陪審員を務める観客の価値観，道徳観である．この趣向が関心を呼び，『一月十六日の夜』は人気を得た．また法廷劇であるので舞台製作費が低くすませられることもあり，この劇は全米中の劇団から上演された．この劇の上演料は，亡くなるまで，アイン・ランドにとっていい収入源となった（Heller, 2009：95）．

さらに，アイン・ランドは，この時期は，革命期のソ連の抑圧的体制下の中で破滅していく人々の苦難を描いた小説『われら生きるもの』（*We, the*

*Living,*1936）を出版した後でもあった．これは，アイン・ランドの小説の処女作である．出版当時は，「赤の時代」（The Red Decade）であったので，アメリカの主流知識人たちや文壇が，大不況期の資本主義の行き詰まりからソ連の体制に希望を託していたので，『われら生きるもの』が好評を受けたということはなかった．それでも，著名なジャーナリストのH・L・メンケン（Henry Louis Mencken,1880-1956）は，この作品を高く評価した．メンケンも，アメリカのリバータリアニズム運動の先駆者のひとりであった．大きく認められることはなかった『われら生きるもの』であったが，読者はこの作品を読み続けた．とはいえ，この作品が，ほんとうに陽の目を見たのは，第二次大戦後にやってきた冷戦時代であった．1959年に，改訂版『われら生きるもの』が出版されてからであった．

ウィルキー選挙戦を終え，アイン・ランドは，『一月十六日の夜』の上演権料を生活費にあて，長編小説『水源』（*The Fountainhead,* 1943）の執筆に集中した．『水源』の困難な執筆作業の息抜きとして，中編『讃歌』（*Anthem,* 1946）も書いた．

『水源』は，独立自尊の魂を持つ天才的建築家ハワード・ロークを主人公として，アメリカの自由主義を祝福した寓話的な政治思想小説である．集団主義，社会主義，利他主義を「悪」として，個人主義，資本主義，利己主義を「善」として描いたものだった．「自由市場競争の資本主義国アメリカと計画統制経済の社会主義国ソ連の対立を，人間の魂という領域に変換」（藤森,2001：114）し，「いかにソ連の世界進出が目をみはるようなものであろうと，アメリカのシステムが正しいのだと，ロークのような英雄を排除することになるシステムには大義もないし勝利もないと読者に語りかけた」（藤森,2001：115）．

『水源』は，後に出版された『肩をすくめるアトラス』が有するスケールの大きさやプロットやテーマの複雑で多層的な組織化には欠ける．しかし，文学作品としては，アイン・ランドの著作の中では，最高のものである（Merrill, 1991：44-47）．言うまでもなく，この小説を書いたアイン・ランドを，アメリカの保守主義言論界は，あらためて歓迎した．

この小説は，出版社に割り当てられた紙の供出量に制限のあった第二次世界大戦中に出版されたので，宣伝（publicity）もろくにされず，出版部数も少ないものであった．にもかかわらず，口コミによって（by word of mouth），読まれ続け，今でも読まれ続け，売れ続けているロングセラーである．

早々と，1955年に，アメリカの保守主義の台頭の諸相を，肯定的に論じたクリントン・ロシター（Clinton Rossiter:1917-70）は，ローズヴェルト政権やアイゼンハワー政権の時代における集団主義的空気のなかで，「右勢力」（Right）に属する若者たちに人気を博した『水源』に描かれた個人主義の輝きについて言及している（Rossiter,1955：169）．

『讃歌』は，『水源』と同時期に執筆されたものであり，そのテーマも共通している．舞台は，近未来の暗黒社会というサイエンス・フィクションである．主人公は，大戦争か大崩壊を経過した近未来の全体主義体制の社会に生まれる．生まれてからずっと集団保育で育ち，学習内容も，仕事も，生殖再生産用の婚姻相手も，すべて「評議会」が決定する社会である．個人は社会のため全体のために存在するのであるから，「私」という一人称は，この世界には存在しない．「私は」と言うかわりに，「私たちは」と言うのが，主人公が生きる社会である．この主人公は，崩壊した過去の文明の残滓を発見したことから，過去の文明の方がはるかに進歩していたことを知り，自分が属する社会の暗黒性に気がつく．そこから彼の暗黒社会からの脱出と新世界構築への試みが始まる．物語は，最後に主人公と，彼とともに逃亡した少女が，「私」という一人称を獲得することで終わる．

1940年代から50年代の保守主義運動の旗手のひとりでもあったフランク・チョドロフ（Frank Chodorov:1887-1966）は，毎月彼個人が出版していた4ページの小冊子『分析』（*analysis*）において，推薦図書として，アイン・ランドの中編小説『讃歌』（*Anthem*）を読者に勧めた（Nash [1976], 2006：22）．

チョドロフは，共和党内の派閥である『オール

ド・ライト』（Old Right）のメンバーであった．この派閥は，ニュー・ディール政策と，（実は，ローズヴェルト大統領が強く望んでいたところの）ヨーロッパの大戦へのアメリカ参入には断固反対していた．アイン・ランドも，一時期ではあるが，この『オールド・ライト』の一員であった．チョドロフは，1952年に，『所得税---すべての悪の根源』（*The Income Tax: Root of All Evil*）や『ひとりは群衆---ある個人主義者の省察』（*One is Crowd: Reflections of an Individualist*）を発表したが，これらの著作の表題が示すように，彼も，またリバータリアンであった．1953年には，のちの1955年に保守主義言論誌『ナショナル・レヴュー』を創刊するウイリアム・F・バックレイ・ジュニア（William F.Buckley, Jr）　とともに，「個人主義者大学連合協会」（Intercollegiate Society of Individualists: ISI）を結成し，個人主義者の大学生たちのネットワークを創設した（Edwards, 2004：19）．

それが縁で，アイン・ランドは，これもまたリバータリアンであるヘンリー・ハズリット（Henry Hazlitt：1894-1993）夫妻と知り合い，新古典自由主義経済オーストリア経済学派の研究者ルードヴィヒ・フォン・ミーゼス（Ludwig von Mises:1881-1993）を紹介された（Burns,　2009：114）．

ハリウッドで働いていた頃には，ランドは，当時のハリウッド映画のソ連賛美の潮流に抵抗し，反共組織である「アメリカの理想を保持する映画連盟」（Motion Picture Alliance for the Preservation of American Ideals）に参加した．だから，後の47年に，ランドは非米活動委員会（House Un-American Activities Committee）において，1944年に発表されたMGM映画『ロシアの歌』（*Song of Russia*）の製作にまつわる虚偽を証言した（Mayhew, 2005：188-89）．この映画は，現実のソ連社会の過酷さを見ずに美化して描いたものだったからである．他にも，ランドは，反共作家連合である「アメリカ作家協会」（American Writers Association）にも加入した（Burns,2009：100-01,123）．

以上のような経緯で，アイン・ランドはアメリカの保守言論界に一角を占めることになった．

4 リバータリアニズムについて

ここで，本論の論点から逸脱するかもしれないが，今までに何度も言及されたところの「リバータリアニズム」や「リバータリアン」という言葉の意味について，確認しておきたい．本論の続編となる論文において，この思想については詳説する予定であるので，本論では，基本的な説明のみにとどめておく．アメリカの保守主義陣営は，後にリバータリアンと呼ばれる人々を多く含んでいたということを認識しておくためにも，この作業は必要である．

リバータリアニズムは，日本においても，副島隆彦や森村進や蔵研也や菅野淳などの著作が示すように，政治学や法哲学の分野では，すでによく知られている．『オックスフォード英語辞典』（*Oxford Dictionary of English:*2005）の定義によると，「市民生活に国家が最低限の介入しかしないことを提唱する極端な自由放任政治哲学．個人の道徳は国家が関わることではないと考える．だから，他人を傷つけない麻薬使用や売春のような活動を非合法的にするべきではないと考える．特にアメリカ合衆国ではそうなのだが，一般的には右翼と関係があり，伝統的リベラリズムが持つ社会的正義の問題への関心は欠如している」（”an extreme laissez-faire political philosophy advocating only minimal state intervention in the lives of citizens: It adherents believe that private morality is not the state’s affair, and that therefore activities such as drug use and prostitution that arguably harm no one but the participants should not be illegal. Libertarianism shares elements with anarchism, although it is generally associated more with the political right （chiefly in the US）; it lacks the concern of traditional liberalism with social justice.”）とある．

この定義は，リバータリアニズムに対して悪意的であり無知である．こういう現象は珍しくない．アメリカにおいても日本においても，リバータリアニ

ズムと新自由主義（Neo Liberalism）を混同させてリバータリアニズムを，2008年の世界的金融危機（リーマン・ショック）の元凶であるとして糾弾する言論が存在するが，これらはリバータリアニズムに対する無知と認識不足から生じている（仲正，2008：139-140）．

リバータリアニズムが前提とするのは，あくまでも，かけがえのない誰の人生とも代替のきかない独自の個別の人生を持つ存在として人間を見ることである（Barry, 1987：4）．アイン・ランドは，本人の意図とは別に，アメリカにおけるリバータリアニズムの提唱者のひとりとして目されてきた．彼女は，「ひとつのまとまった集団の頭脳とか，ひとつのまとまった人種の頭脳というものなど存在しない．同じく，ひとつのまとまった集団の業績とか，ひとつのまとまった人種の業績なども存在しない．あるのは，個人の頭脳と個人の業績だけだ．文化というものは，区別のつかない集団の誰が作ったかわからないような生産物ではない．個々の個人の知的業績の総計が，文化である」（Rand,1964：148/藤森訳236）と述べている．つまり，リバータリアンは，国家や性別や人種や民族性などによって分類される集団に個人を還元することをあくまでも拒否する．人間は，どの集団に帰属しようが，いくつの集団に帰属しようが，個別の個人としての人生を生きるしかない存在である．リアルにあるのは，個別の人間の個別の人生だけだ．だからこそ，リバータリアンは，個人の生存をおびやかし幸福の追求を妨害する政治経済体制を廃し，小さな政府を支持する．共通善の名のもとに個人の諸権利を抑圧する集団主義や全体主義や専制政治や独裁制を憎む．

前述のＯＥＤの定義が述べるように，確かに，この思想の信奉者はアメリカ合衆国に多いが，その影響はより広範囲に及んでいる．英国やカナダやオーストラリアやニュージーランドやアイスランドなどの英語圏はもちろんのこと，フランスやドイツやノルウェイ，イタリア，ロシア，ギリシアにも，リバータリアニズム系の政党やシンク・タンクがある．リバータリアニズムは一枚岩ではなく，様々な立場があるのだが，どの種類の，またどの国のリバータリアニズムも，共通する要素は，法の支配のもとにおける個人の自由の最大化と，国家の介入の最小化と，自由市場資本主義の支持である．リバータリアニズムの基本概念は，個人主義と，個人の権利と，自生的（自発的）秩序と，法の支配と，制限された政府と，自由市場と，生産する美徳と，利益の自然調和と，平和である（Boaz,1997：16-19）．リバータリアニズムとは，アメリカ独立革命やフランス革命などの市民革命の土台である啓蒙思想，古典的自由主義（Classical Liberalism）の原点にもどり，その精神をより徹底して実践することをめざすものである．

ところで，18世紀に基本的形を成した啓蒙思想（もしくは古典的自由主義）は，形成以来，近代社会の基本原理であり続けているはずである．そのような基本原理を信奉する人々は「リベラル」（liberal）と呼ばれてきた．では，なぜ，リバータリアンは，自らをリベラルと称しないのだろうか？

なんとなれば，「リベラル」とは，制限された小さな政府を支持する古典的自由主義の信奉者ではなく，副島隆彦の言葉を借りれば，「社会主義的な福祉優先派の人々」「弱者救済を至上の価値と考える人々」だからだ（副島：1999：159）．つまり，「ゆりかごから墓場まで」国家が個人の人間を保護するかわりに，個人を管理統制する大きな政府を支持する人々が，「リベラル」である．そのような大きな政府を運営する官僚による支配と官僚組織の肥大化を支持する人々が，「リベラル」である．

この「リベラル」の意味の変質が生じた歴史的経緯は，以下のとおりである．古典的自由主義の起源は，宗教改革が引き起こした宗教戦争である．信仰をめぐる血で血を洗う長年の凄惨な戦いは，脱神学化した規範を西欧人に要求し，自然法の世俗化をもたらした．正統性をめぐる価値の対立の凄まじさに懲りた人々は，神の摂理ならぬ「自然の法」＝世界を支配する掟の存在を自明の前提にして，その法に従うのならば，あとのことは互いに不問にすること＝寛容（tolerance）を学んだ．

しかし，19世紀の終わりにはすでにして，教会支配や絶対王政の圧制や宗教的不寛容の記憶が人々の

記憶から薄れていた．人々は，苦闘のすえに獲得した政治的自由や個人の諸権利を守るには，普段の警戒が必要であることを忘れた．自分たちの社会の問題の解決を政府にゆだね，政府の選択によって経済が動き管理されることを望むようになった．てっとり早く，多くの人々の幸福を実現させるには，有効な政策を政府が強権を発動して実践するべきであるという考えが生まれていった．

そこに第一次世界大戦が起きた．アメリカにおいてもヨーロッパにおいても，政府は戦争に対処するために，高い課税，民間企業の国有化，検閲や徴兵などの国民管理統制を強行した．自由主義は戦争とは絶対にあいいれない．自由な社会は戦争で吹き飛ばされる．個人の諸権利のうち，基本的な生存権そのものが蹂躙された．歴史上初めての大規模な近代戦は，古典的自由主義の人間像を否定した．近代戦の大量殺戮は，個人の主体性と尊厳を無効にした．個人の個別性と自立性と自律性という言葉が，戦場の死体の山の前では無意味なお題目となった．

その幻滅の上に，集団の利益を個人の諸権利の擁護に優先させる思想への期待が生まれた．社会は人為的に操作して計画的により良く作りかえることができるとする社会工学（social engineering）的発想が生まれた．1930年代の大不況時代には，資本主義に対する幻滅から，社会主義国家ソ連を美化し，マルクス理論による国家経済統制に希望を託する人々が増えた．ニュー・ディール政策は，産業，労働，統治の連邦化を促進した．政府に巨大な権力が託された．

そこに第二次世界大戦が起きた．またも国民の諸権利は戦争という非常事態の要請の前に侵害された．かくして，第一次世界大戦と，大不況時代対策のニュー・ディール，第二次世界大戦と続くにつれて，アメリカの知識人たちの間に，大きな政府を求める熱狂が起きた．この知識人たちは，自分たちのことを「リベラル」と称したが，その政治的経済的立場は，古典的自由主義のリベラリズムのそれとは反対のものだった．「リベラル」の意味の変質と逆転は，このような経緯のもとに生まれた（Boaz, 1997：46-52）．

5　保守主義陣営からの『肩をすくめるアトラス』批判

アメリカ保守主義言論界に一角を占めたアイン・ランドだったが，1957年の『肩をすくめるアトラス』発表後に，保守主義言論界と決別した．『肩をすくめるアトラス』書評の中でも，もっとも悪意に満ちた批評が，同志であるはずの保守言論人から放たれたからである．

実際には好意的な書評も数多かった．保守主義言論界と敵対するリベラル知識人のひとりであったクリフトン・ファディマン（Clifton Fadiman: 1904-99）でさえ．『ブック・オブ・ザ・マンス・クラブ』（*The Book-of-the-Month Club*）の書評において，アイン・ランドの物語を語る力（narrative power）やストーリー・テリングの巧さを指摘した．ランドの筆力は，アレクサンドル・デュマ（Alexandra Dumas:1802-70）やマーガレット・ミッチェル（Margaret Mitchell: 1900-49）のそれに匹敵すると賞賛した．このファディマンというのは，アイン・ランドが前作『水源』（*The Fountainhead,*1943）において，エルスワース・トゥーイーのモデルのひとりにした人物であった（Berliner, 2009：133-37）．エルスワース・トゥーイーという登場人物は，温厚なオピニオン・リーダーの仮面をかぶった全体主義者であり，主人公のハワード・ロークを，陰謀をめぐらして迫害するのだったが，トゥーイーのモデルとした人物から好意的な書評をされたのは皮肉なことであった．

しかし，アイン・ランドが読むに値する書評を掲載すると判断していた主要新聞や雑誌は，『ニューヨーク・タイムズ』（*The New York Times*）をはじめとして，ことごとく『肩をすくめるアトラス』を評価しなかった．中でも，1955年にウイリアム・F.・バックレイ・ジュニア（William F. Buckley, Jr.）が創刊した保守主義言論誌『ナショナル・レヴュー』（*National Review*）の書評は，異常に辛辣であった．

書評者は，ホイティカ・チェンバーズ（Whittaker Chambers:1901-61）であった．チェンバーズは，

元共産党員で，ソ連のスパイであったのだが，後に転向し，『ナショナル・レヴュー』の上級編集者（senior editor）を努めた敬虔なクエーカー教徒（Quaker）であった．

1957年12月28日号の『ナショナル・レヴュー』に掲載された『肩をすくめるアトラス』書評の題目は「ビッグ・シスターがあなたを見張っている」（”Big Sister Is Watching You”）であった．この言葉は，言うまでもなく，ジョージ・オーウェル（George Orwell:）の『一九八四年』（*Nineteen Eighty-Four,* 1949）の“Big Brother Is Watching You”のもじりである．

以下に，チェンバーズの『肩をすくめるアトラス』書評内容の要点をポイント・フォームで紹介する．

（1）非常に馬鹿げた本（a remarkably silly book）である．

（2）黒と白しか存在しない．「光の子どもたち」と「闇の子どもたち」の闘争という世界観の極端さと単純さ．過度な戯画化．

（3）登場人物の名前が滑稽である．主人公の英雄たちのひとりの名前はFrancisco Domingo Carlos Andres Sebastian d’Anconiaであり，もうひとりはRagnar Danesjöldである．卓越した銀行家の名前は，ギリシア神話に登場する，手に触れるものがすべて金に変わったというミダス王にちなんで，Midas Mulliganである．

（4）ヒロインが，多くのヒーローと恋愛関係になるような，「すべての騎士が王女様と結婚しましたとさ」的おとぎ話なのに，騎士たちと王女様の間に子どもは生まれない．子どもは，ほとんど登場しないおとぎ話．いわば鉄筋コンクリート製おとぎ話．

（5）「光の子どもたち」は，民間の企業家やビジネスマンで，「闇の子どもたち」は，リベラル左派，ニュー・ディーラー，社会福祉を推進する国家主義者（welfare statists），国境を超えて世界をひとつにしたい人々（One Worlders）という途方もない構図．

（6）「光の子どもたち」は，優秀で有能なニーチェの超人で（super men）であり，「闇の子どもたち」は，無能な寄生虫で，ニーチェの言う「末人」（last men）であるという構図．有能な生産性高い超人と無能な寄生虫である末人しか存在しない人間社会を想定している単純さ．

（7）義賊の「ロビン・フッド」は作家にとっては絶対的に邪悪な人物である．なんとなれば，ロビン・フッドは，金持ちから，ただ彼らが金持ちであるからという理由で，財産を奪い，貧しい人々に与えたのだが，それは貧しい人々に，努力することなく他人の財産を手にすることを許すことであり，寄生虫的生き方を正当化することだ．弱者だから，強者のものを奪っていいわけではないという作者の説には，実に小さくはあるが真理の種ぐらいはあるにしても，これは奇妙な見解である．

（8）優秀なテクノクラートのエリートたちが，頭脳のストライキを図り，こっそりとロッキー山脈の中に新世界を建設し，旧世界を打ち捨て破滅するがままに放置する．しばらくしてから，彼らは破滅した旧世界を立て直すために旧世界に帰って行く．なんという荒唐無稽さ．

（9）神も宗教も原罪も拒否する無神論に立脚していて，作家が敵対しているはずの社会主義のマルクスと同じである．

（10）作家が作る神なき世界においては，人間関係は，むきだしの自己利益によって結びついている．自分の価値と，相手の価値を交換することが人間関係になり，作者は利他主義を徹底的に邪悪なものと主張する．

（11）このような神なき唯物論的世界においては，人間に可能な生き方は，以下のふたつしかない．神がいない世界において，人間はもっと悲劇的に，もっと孤独になる．もうひとつの生き方は，反対に，もっぱら，生きている間の幸福を求めるだけになる．作家は，自分のために生きることこそ，人生の道徳的目的であると言うが，神なき世界においては，人間が定めた道徳は，人間を律するものではなく，知性や霊性に裏付けられたものではなく，ただの享楽追求になるだろう．

（12）生産性豊かなエリートたちが新世界に行ってしまったので，旧世界が破滅してしまうのだから，そのエリートたちが帰還した旧世界は，そのエリートたちが支配する世界になるだろう．Big Brotherが監視，統制，支配する専制的社会になるだろう．それこそ，作家が忌み嫌うスターリンによる社会主義体制であり，ヒトラーの全体主義体制ではないか．

（13）作家は，そのような極端な戯画を，いかにも政治的事実（political reality）であるかのように見せつける．

（14）ともかく，この作品は傲慢であり，独善的であり，教条主義である．

（15）小説全体に，作家の思想に与しない人間は「ガス室へ行け！」という声が響き渡っている．

（16）このような言葉の巨大な山（this mountain of words）を生産した作家のすさまじい労力と鍛錬と忍耐強い職人芸には同情的痛みを感じざるをえない．

このチェンバーズの『肩をすくめるアトラス』書評の姿勢は誠実なものではない．書評者の価値観はさておいて，書評対象の作品のメッセージをできる限り正確に把握するのが，書評者の役割のひとつである．しかし，チェンバーズは，作品の主人公たちが，なぜ新世界を構築するのか，その彼や彼女たちなりの「大義」を理解していない．その「大義」は，何度も何度も作品の中で言及されているのにも関わらず．ジョン・ゴールトがアメリカ国民に向けてラジオを通じて行った長い長い演説を，このチェンバーズは，書評者でありながらきちんと読んでいないことは確実である．

ここで，『肩をすくめるアトラス』で展開されたアイン・ランドの思想「客観主義」（Objectivism）の内容を確認しておこう．以下は，筆者がまとめたものである．

（1）人間は生き物である．生き物である以上は，生き延びるということが目標である．だから，人間が生き延びることに益になるものは「善」であり，人間が生き延びるのに障害になるものは「悪」である．生き延びることに利益になることを求めなければならないという意味において，人間は利己的であらねばならない．一般的に言われる利己主義の意味は，「欲望のおもむくままに生きること」であるが，利己主義の本来の意味は「自己に利益があるようにすること」である．「欲望のおもむくままに行動すること」は自己利益に反するので，真の利己主義ではなく，単なる気まぐれである．

（2）人間が生き延びるということは，どういうことか．現実は人間の思惑とは関係なく存在する客観的実体である．人間は，現実を認知し把握することができるが，それを創造することも変えることもできない．たとえば，人間が水を望んでも水は出現しない．水のある場所まで移動しなければならない．人間は植物ではないから，移動せずとも日光や土の中の栄養素を吸収して生き延びることはできない．獣のように,本能の中に生き延びるための行動がプログラミングされているわけでもない．獣のように身体能力が高いわけでもない．人間の場合は，すべて学習しないと，生き延びることができない．脳の力，思考力だけが，人間の持つすべてだ．人間は，思考力によって，自分の欲望や願望では変わらない現実に働きかけて，自らにとって価値あるものを獲得し生産することによって生き延びる．人間の英雄性は，このような生産性にある．

（3）思考とは何か．人間の諸感覚が捉えた事物をそれと確認し（identify），他の事物と関連付け統合する（integrate）過程が思考である．この思考を稼動させる機能が理性（reason）である．理性だけが，人間が客観物である世界に対処して生き抜く知識を獲得する手段であり，行動への適切な指針である．頭脳と身体を適切に使って現実に対処し，自分が生き延びるために利益になるものを入手できれば，その思考と行動は合理的であるということであり，それに失敗するのは思考と行動が合理的でなかったということである．思考と行動において合理性がない

と，しかも長期的視野に基づいた合理性がないと，人間は生き延びることができない．

（4）したがって，信仰や感情を知識獲得の手段とする神秘主義や，確実な知識は人間には獲得不可能なものという懐疑主義は否定される．また，人間存在が，運命とか育ちとか遺伝子とか経済状況の犠牲者であるとする決定論も否定される．人間の生は，客観的実体である現実に対処し，生き延びることに利益になることを選択し実践するという合理的な思考と行動の蓄積であって，それ以外のものではない．

（5）そういう存在としての人間が，そういう存在としての人間と関わるということは，互いの合理的な思考と行動によって獲得した価値あるものを，合意の上で交換するという関係でなければならない．互恵的関係でなければならない．したがって，正しい人間関係は，すべて交易者，商人（trader）の関係である．愛情関係や友情関係も，互いが生み出した価値の交換関係である．この意味において，「無償の愛」はありえない．「利他主義」はありえない．ありえない利他主義を推奨する人々は，他人が生み出した価値と交換されるにふさわしい価値を生産し提供することなしに，他人が生み出した価値を手にしたい搾取者か，たかり屋か，寄生虫である．

（6）上記のような人間の条件と人間関係のあり方を守ることが道徳である．この道徳の実践を擁護する経済体制は資本主義である．個人間の合意のうえでの交換関係，合理的な自己利益に基づく交換行為に干渉し規制する体制は邪悪である．したがって，自由放任資本主義が道徳的経済体制である．ただし，資本主義はいまだ完全には実現されたことがない「未来のシステム」である．なぜならば，道徳の実践の不足により，互恵的交換関係ではない利他的な搾取関係は，いろいろな形で残っているからである．世界史上初めて，資本主義社会として建国されたアメリカ合衆国でさえ，混合経済や経済統制をまぬがれていないからである．

（7）この道徳の実践を擁護し，個人の生き延びる権利と，それに伴う所有権を保護する政治体制は，夜警国家である．合理的な思考と行動によって獲得した価値あるものに対する個人の所有権が守られないということは，人間の生そのものが冒涜されることである．それらの個人の諸権利の侵害は，具体的には物理的強制力（暴力）の行使によるので，政府は，物理的強制力（暴力）の行使を抑止する物理的強制力（暴力）を持たなければならない．その力の行使は，恣意的であってはいけない．個人の諸権利を侵害する暴力に報復し反撃するときのみ，力の行使がゆるされる．

（8）物理的強制力からの脅威がなければ，生き延びるために合理的で長期的視野に基づいた自己利益のための活動に人々は専心できる．そのような人間で成立する自由な社会は発展し繁栄する．それ以外のことに政府が介入し規制することは，国民の合理的な思考と行動の自由な実践を抑圧する．ひいては，それらの自由な実践によって形成される自由で豊かな社会の発展を阻害する．統治機関による規制は，その規制行為に従事する官僚組織の肥大を招き，税金公金浪費が増大する．そもそも，政府運営資金は，政府が提供するサーヴィスに対する国民からの「自主的支払い」である（べきだ）．略奪者による物理的強制力を抑止する公的機関である裁判所と警察と軍の運営に対する「自主的支払い」である（べきだ）．国民の収入は政府や官僚の所有物ではない．「公」とは，政府や官僚組織に属する個人の私物に転化する危険が常にある．政府や公的機関が，国民にとって最大の略奪者にならないように，最悪最強の公設暴力団にならないように，私人である個人の国民は常に警戒しなければならない（藤森,2013a：120-22）．

この「客観主義」において，もっとも理解しにくいのは，「利他主義」の否定であろう．ランドの「利他主義」の理解は独特である．彼女は，利他主

義を，親切さや善意や他人の諸権利への尊敬と同義にはしていない．利他主義は，前提として個人としての人間の否定があるとランドは考える．個人としての人間の理性に基づいた自由意志による選択より，集団の意向を優先させると考える．

だからこそ，『肩をすくめるアトラス』に描かれる新世界，ゴールト峡谷のメンバーは，以下のことばを誓う．「私の人生と愛によって，私は誓う．私は決して他人のために生きることはなく，他人に私のために生きることを求めない」（“I SWEAR BY MY LIFE AND MY LOVE OF IT THAT I WILL NEVER LIVE FOR THE SAKE OF ANOTHER MAN, NOR ASK ANOTHER MAN TO LIVE FOR MINE.”）（Rand, [1957], 1992：675）と．したがって，当然のことながら，利他主義が基本となるシステムである全体主義，共産主義，社会主義を，ランドは否定する．

以上のような思想の文脈において，『肩をすくめるアトラス』は構築されているのに，書評者のチェンバーズは，その文脈を無視して，上記の（10）や（11）のような批判をしている．アイン・ランドの文脈における「自己利益」「利己主義」「利他主義」を理解せずに，世間一般に流通する言葉の定義からのみ，作品を批判している．これは，単なる誤読ではない．故意の誤読である．チェンバーズは，ランドの思想を理解しようとしなかったからではなく，理解に失敗したからではなく，理解できた．だからこそ，その理解が自分の価値観を非常に脅かすものであったので，故意に世間一般に流通する言葉の定義のなかに閉じこもり，作品への攻撃をしたのだ．

何よりも，有能な人々と有能な人々に寄生しなければ生きていけない人々で成立している社会という世界観を，戯画的なおとぎ話的世界観であると批判するチェンバーズの指摘は無意味である．自らの思想をもっとも効果的に表現する手段として，戯画的な二元化された世界を設定することには何の問題もない．小説家でもあったチェンバーズが，そのようなことに無知であったはずがない．にも関わらず，チェンバーズは，一種の寓話文学である『肩をすくめるアトラス』を寓話だからいけないと批判するような愚かしいことをしている．つまり，このわざとらしい愚かしさこそが，チェンバーズが，『肩をすくめるアトラス』を理解していた，ということの証左である．

だからこそ，批判のための批判としか言えないような無駄口が，この書評に氾濫している．（3）の登場人物の名前の珍奇さなど，仰々しく指摘するほどの問題ではない．（15）の指摘も，これまた非常に質の悪い悪意の産物である．ホロコーストの比喩を持ち出すことは，ユダヤ系のアイン・ランドに対する強烈な皮肉であり悪意である．（16）の指摘など，言わずもがなの捨て台詞である．そうなると，この書評の，書評には似合わぬ，自己顕示的な華麗なる（？）レトリックや語彙の豊かさなども，語彙が乏しいとよく指摘されるソ連からの移民であったアイン・ランドへの強烈なあてこすりに感じられるほどだ．

このようにチェンバーズの『肩をすくめるアトラス』書評は，批判のための批判でしかないのであるが，しかし，有益な示唆もある．（11）の指摘が示すような危険は，アイン・ランドの思想には，確かにある．長期的視野にもとづいて合理的に自己利益をはかることこそ，より良く生きることというアイン・ランドの見解は，神の定めた（とされる）掟を設定しない世界においては，自己利益をはかり生きることが，ただの強欲さの発揮になりやすいであろう．総じて保守主義者たちは，自然権（natural rights）派であり，実定法（positive law）的発想はしない．人間存在を誤謬に満ちたものとして考えているので，人間の理性や合理主義に対しては懐疑的である．

また，（12）の指摘は，非常に適切である．社会主義や全体主義を憎んでやまないアイン・ランドが，社会主義や全体主義と同じ「設計主義」,「社会工学的発想」を採用しているというチェンバーズの指摘は正しい．保守主義者は，人間が考え設計した人工的社会のありようは機能しないと考え，「自生的秩序」を重んじる．

拙論「衝動から思想へ---アメリカ保守主義の誕生とハイエク『隷属への道』」（藤森，2013b）

において記述されたことの反復になるが，アメリカの保守主義の代表的言論人のひとりであるラッセル・カーク（Russell Kirk:1918－94）は，『保守主義者の心』（*The Conservative Mind*）において保守主義者の共通点として，以下の6点を掲げている（Kirk,1953：7-8）.

（1）超越的秩序，超越的存在，自然法を信じる
（2）人間存在の生産性豊かな多様性と神秘性を尊重する.
（3）文明社会の保持には秩序と階層が必要と考える.
（4）所有権なくして自由はないと考える.
（5）抽象的構想により人間社会をより良いものにできるという，社会工学的試みは成功しないと考える.
（6）急激な改革や性急な変革は，究極的には失敗すると考える.

アイン・ランドは，社会主義的ニュー・ディール政策や集産主義（collectivism）が跋扈するローズヴェルト政権時代を舞台に，個人の自由な生き方を貫く天才的建築家の闘いを描いた『水源』（*The Fountainhead,*1943）によって，アメリカの保守主義言論界に迎えられた．しかし，『水源』の次に発表した『肩をすくめるアトラス』は，上記のラッセル・カークによる保守主義者の６条件のうち，（1）も（5）も（6）も否定するものだった．人間集団を有能で生産性の高い人間と寄生虫に分けたことによって，（2）も否定していたとも見えたかもしれない．ともあれ，アイン・ランドは，このホイティカ・チェンバーズによる『肩をすくめるアトラス』書評以後，保守主義知識人集団から排除された.

6　アイン・ランドによるアメリカの保守主義への反撃

アイン・ランドは，1960年の12月に，「保守主義---ある死亡記事」（*"Conservatism: An Obituary"*）という題目の講演をした．その文章は，『資本主義---知られざる理想』（*Capitalism: The Unknown Ideal,1966*）に収録されている．「保守主義---ある死亡記事」（Rand, 1966：214-25）の内容を，これもポイント・フォームで紹介する.

（1）いわゆる「保守主義者」も「リベラル」も世界が致命的な対立に直面しているので，文明を救わなければならないと言うが，どちらも，その対立が何と何の対立か把握していない．それは，資本主義と国家主義（statism）の対立である（214）.
（2）「保守主義者」も「リベラル」も，それぞれが自由を守ると言っているが，何から自由を守るのか，どちらもわかっていない（215）.
（3）自由とは，国家からの自由，政府の強制力からの自由である（215）.
（4）自由を守るとは，個人の諸権利，つまり生命，自由，幸福の追求の権利を守ることであり，それらを守る政治経済体制は資本主義である（215）.
（5）「リベラル」がやろうとしていることは，「盗むこと」によって国家主義を立ち上げるということだ．「リベラル」は，自分たちがやろうとしていることを明示されることを怖がっている．「福祉国家」だろうが，「ニュー・ディール」だろうが，「ニュー・フロンティア」だろうが，どう呼ぼうと，それは「国家主義」の婉曲な呼び名だ（216）.
（6）「保守主義者」は，いったい何を保守（conserve）するつもりなのだろうか．彼らは，自分たちは「アメリカ的生き方」（American way of life）を守ると言っているが，「アメリカ的生き方」とは，資本主義のことだ．彼らは，自分たちが守るべきものは資本主義であることから目を逸らしている．それは，我らの文化に根深く巣くっている利他主義（altruism）と資本主義のあいだに存在する葛藤に麻痺状態になっているからだ（217）.
（7）アメリカ合衆国は，人間は自分自身のために存在する権利があり，誰の犠牲にもならず，誰をも犠牲にせず，人間関係とは互恵関係であ

り，自主的な選択に基づく交易（trade）関係であるという原則のうえに構築された国である（218）.

（8）ところが，この原則は，アメリカの政治制度において単に示唆されているだけにすぎず，十分に分節化されていないので，今や，このアメリカの基礎たる資本主義の道徳的基盤というものが侵されつつある．資本主義の哲学的防衛が欠如している（218）.

（9）利他主義の道徳，つまり自己犠牲という規則に基づいた社会制度は社会主義であり，その変形であるファシズム，ナチズム，共産主義である．これらの制度は，みな人間を集団の利益のために犠牲にする．ソ連はその典型である（218）.

（10）アメリカは，アメリカの土台が資本主義であることが道徳的に罪であるかのように感じている．自らの富や力や成功など，アメリカの制度が持つ最高に偉大な美徳に謝罪的な態度をとっている．その偽善的な姿勢が，アメリカをして世界のリーダーになることの障害となっている．そのような自信のない姿勢では，世界の人々はアメリカに続くことができない（219）.

（11）「保守主義者」たちは，アメリカと資本主義を神への信仰から正当化するが，これはとんでもない誤謬である．政教分離こそがアメリカの国是であり根本的原則である．神という存在や，証明できないものへの信仰を土台に考えることは，合理的議論を否定することである．それでは自由や正義，所有権，個人の諸権利を合理的に正当化できなくなる．理性より信仰を上位に置くなどとんでもない（220）.

（12）資本主義は，アメリカの「伝統」だから守るべきだと主張する「保守主義者」たちは間違っている．伝統主義とは，現状維持を尊重することであり，事物が正しいか善かではなく，古いからこそ良いと主張することである．資本主義は，アメリカの伝統だから守るべきなのではない．守るべき道徳，政治哲学だから，守るべきなのだ（220－21）.

（13）アメリカは，従来の政治的伝統を壊し，人間の歴史においてまだ実現されていない制度を作り上げようとした人々の手によって建国された．アメリカの建国者たちは，自分たちの知力以外には助けは何もなかった（221）.

（14）アメリカの建国者たちが原則としたのは，自分の力で立つこと，自分自身の判断で生きること，生産的で創造的な改革者（innovator）として絶えず前進し進歩することであった．このアメリカにおいて，伝統なるものを資本主義の弁明の基礎に置くことなどは，言語道断である（221）.

（15）「保守主義者」たちの中には，資本主義を人間が生来堕落した存在であるという観点から支持する人々もいる．彼らは，自由競争による資本主義のほうが，多くの人々が関与するから，独裁者とか王とか貴族の決定より，ましであろうという観点から，資本主義を支持する．人間存在は堕落しているので，王や貴族や独裁者の決定では危険すぎる．多くの人々が参画する自由な社会は，人間という不完全な生き物に妥当なありようだと言う．こんな愚劣な考えはない．それでは，人間社会は，ほんとうは独裁制や専制が望ましいのだが，人間存在は，それを許すほど聡明ではないと言っているのと同じである（222）.

（16）個人の諸権利を認める政治経済体制は資本主義だけである．資本主義と利他主義は相容れない．アメリカの「保守主義者」たちは，それを直視し，実践するだけの道徳的哲学的一貫性がない．アメリカの「保守主義者」たちは，単なる現状維持を支持しているだけである．その曖昧な，現実逃避的な姿勢は，集産主義に利するだけである（224-25）.

以上が「保守主義---ある死亡記事」の内容である．「アメリカの保守主義者」たちは，「資本主義」を明確に支持しないという点において，知的不誠実さを，アイン・ランドによって批判されている．しかし，この文においては，「資本主義」の定義は提示されていない．なんとなれば，この文が対象として

いる読者は，アイン・ランドの思想，彼女が呼ぶところの「客観主義」（Objectivism）の文脈における資本主義がいかなるものであるか知っていることを前提としているからである．

さきに，「客観主義」の説明で述べたことの反復になるが，アイン・ランドが定義するところの資本主義とは，合意に基づいた自由で自主的な，相互に利益のある交換関係のことである．「資本主義」と言うが，「資本」そのものには焦点が置かれていない．「人間の関係のありよう」に焦点が置かれている．つまり，長期的視野に基づいて自己利益を図って生きている人間が，同じく長期的視野に基づいて自己利益を図って生きている人間の生産物と，自分の生産物を，合意と納得の上に交換するのが，アイン・ランドの言う資本主義である．

アイン・ランドの資本主義観の前提となる世界は，「自分の力で生産する者と，他人の生産物にたかって生きる者が相克する場所」である．アイン・ランドにとって人類の歴史は，「他人の生産物にたかって生きる者から，自分の力で生産する者を解放するプロセス」である．この意味において，アイン・ランドの定義する資本主義は，「道徳」であり「美徳」である．だからこそ，アイン・ランドは，「純粋な資本主義制度というものは，いまだかつて存在したことがない．アメリカでさえ，そうである．政府による規制がさまざまな程度にあり，それは最初から資本主義を切り崩し歪めてきた．資本主義は過去の制度ではない．未来の制度である．ただし，人類に未来というものがあればの話だが」（”A pure system of capitalism has never yet existed, not even in America; various degrees of government control had been undercutting and distorting it from the start. Capitalism is not the system of the past; it is the system of the future----if mankind is to have a future.”）と言った（Rand, 1967：37）．

アイン・ランドの言うところの「資本主義」は，「資本主義」というより，「ヒューマニズム」と呼ぶほうが妥当なほどに，かくも原理的であり，根源的である．皮肉にも，アイン・ランドの資本主義観は，カール・マルクス（Karl Marx:1818-83）やフリードリッヒ・エンゲルス（Friedrich Engels:1820-95）などの社会主義者たち，共産主義者たちと，同じ問題意識から始まっている．

マルクスにせよ，ランドにせよ，起源にあるのは，公平さ（fairness）が実現されない世界への怒りである．人間が自分の知力や体力の発揮（＝労働）によって獲得し生産したものが略奪され，搾取されることへの怒りである．マルクスは，その怒りから始まって，資本，労働，商品の構造を考察して，資本主義を否定したが，一方，アイン・ランドは，同じ怒りから，個人の人間どうしの信義，道徳，美徳を考察し，自由な個人間の搾取や略奪のない等価交換としての資本主義を祝福した．

アイン・ランドは，アメリカの保守主義者たちは，この道徳としての資本主義観を理解していないからこそ，自分たちの思想的正当性を明確に主張できないと批判した．その結果，アメリカの保守主義者たちは，国家主義に侵食され，市民の自由や財産権や幸福を追求する権利（＝長期的視野に基づいた合理的な自己利益を追求する権利）を守る使命を果たしていないと，批判した．「伝統」を守ると言いながら，アメリカ合衆国の建国の祖たちが立ち上げたアメリカの原則という伝統は守らずに，ただただ古いものには価値があるといった現状維持に堕していると批判した．国家や王や貴族に支配されない自由こそ，建国の祖が闘い獲得したものであるのに，その自由でさえ，アメリカの保守主義者たちは冒涜していると批判した．なんとなれば，彼らは，人間存在は生来堕落したものであるから，王や貴族は必然的に政治に失敗するのであるから，まだ自由な民主主義体制のほうがましであると考えるからである．これほどアイン・ランドにとって許しがたい考え方はなかった．なぜならば，「アメリカの保守主義者たち」の最大の絆は，アメリカ合衆国という国家の建国の理念であるところの市民政府，社会契約論という西洋近代が到達した啓蒙思想への信奉であったはずであったからだ．

もし，人間が生来堕落した存在であり，失敗確実であるのならば，人間は理性を駆使しての合理的選択などできないし，長期的視野に基づいた合理的自

己利益を実現することもできないではないか．西洋近代が獲得した啓蒙思想に立脚した互恵的な社会を形成する力が人間には生来欠如しているのならば，互いの労働の生産物を合意の上に基づいて等価交換するという資本主義は，永遠に未完のプロジェクトである．それならば，人間の文明そのものが不可能になる．社会の進歩というものが不可能になる．そもそも，そのような人間存在ならば，生きる意味などない．

アイン・ランドから見れば，アメリカの保守主義者たちは，自分たちの信条が依拠するはずの道徳的原則を主張する知的誠実さがなく，自分たちに知的誠実さが欠如していることそのものすら認識できず，したがって自らの道徳的原則に立脚した政策提言ができるはずもない．したがって，アメリカの保守主義者たちには，リベラルという国家主義者に道を譲る未来しか残されていない．だから，アイン・ランドは，アメリカの保守主義に対して「死亡記事」を書いた．

7　部族主義としての「家族崇拝」

アメリカの保守主義への批判は，「死亡記事」だけで展開されたわけではない．「凡庸さの時代」（“The Age of Mediocrity”）という講演において，アイン・ランドは，アメリカの保守主義者たちの「家族」や「家庭」の重視というものも，一種の「強迫観念」（obsession）だと指摘している．「＜家族＞を崇拝するということは，小型の人種差別である．部族崇拝というものを連続劇にたとえれば，家族崇拝というものは，それの粗野なる第1回のようなものである．家族崇拝は，人間の価値より，たまたまの偶然でしかない出自や出生を優先させる．選ぶことができない血族という肉体的結びつきを人間の選択より優先させる．部族への義務を，人間の自分の人生に対して有する権利より優先させる」（” The worship of the ‘Family’ is mini-racism, like a crudely primitive first installment on the worship of the tribe. It places the accident of birth above a man’s value, the unchosen physical ties of kinship above a man’s choices, and duty to the tribe above a man’s right to his own life.”）と述べている．

「家族」というものを過度に尊重し神聖視することは，アイン・ランドが指摘するように，生まれつきの遺伝要素に拘泥することにつながり，それは人種差別と紙一重であることは確かである．また，家族の神聖視は，家族の一員である個人にとって抑圧的に作用することがありうる．個人の自由な選択や幸福よりも，まず家族という集団の利益が重視されるのであるならば，家族こそが，個人の独立と自主性を侵食する「文化的制度」であり，それは国家主義を生む集団主義の温床になる．また，家族の中では，より強い成員に，弱く責任を負う力のない成員が依存することになるのだが，それは支配者と奴隷の関係と同じである．家族の中では，より強い成員も犠牲者になりうる．より強い成員はより弱い成員に従属されると同時に，弱い成員から搾取されることになるからだ．家族を神聖視することは，このような抑圧的搾取的人間関係を助長し，個人の諸権利を侵害することに加担することになる（Sciabarra, 1995：349-50）．

以上が，アイン・ランドが，「アメリカ保守主義」の知的脆弱さと因習性と現状維持的怯懦を批判することによって，「アメリカ保守主義者」たちと決別した経緯であった．では，アイン・ランドは，「保守主義者」ではなく，「リバータリアン」である自分を認識したのか？　彼女は，自分の思想を「客観主義」と呼んだが，「リバータリアニズム」と呼んだことは一度もない．この問題については，次の機会に論じる．

引用・言及文献

＜アイン・ランド，保守主義関連＞

Berkiner, Michel S. 2009. “The *Atlas Shrugged* Reviews,” *Essays on Ayn Rand’s Atlas Shrugged* ed by Robert Mayhew,Lanham Lexington Books, 133-43.

Britting, Jeff.2004. *Ayn Rand*. New York: Overlook Duckworth.

Chambers,Whittaker.1957. “Big Sister is Watching You”*National Review,* December28.（http://whittakerchambers.org/2012/03/17/big-sister-is-watching-you/）

Burns, Jennifer.2009. *Goddess of the Market: Any Rand and the American Right*. New York: Oxford University Press.

Kirk, Russell.[1953],1985. *The Conservative Mind*: *From Burke to Eliot*. Washington, D.C.: Regenery Gateway.

Mayhew, Robert ed. 1995. *Ayn Rand’s Marginalia: Her Critical Comments on the Writings of over 20 Authors*. New Milford: Second Renaissanve Books.

Merrill, Ronald E.1991. *The Ideas of Ayn Rand.* Chicago: Open Court.

Nash, George H[1976],2006. *The Conservative Intellectual Movement in America Since 1945.* Wimington: ISI Books.

Rand, Ayn.[1936],1996.*We the Living*. New York：Macmillan, New York: New American Library. アイン・ランド著，脇坂あゆみ訳『われら生きるもの』ビジネス社，2012.

--------.[1936],1987.*Night of January* 16th. New York: Plume.

-------.[1943],1993. *The Fountainhead*. NewYork: New American Library,1993. アイン・ランド著，藤森かよこ訳『水源』ビジネス社，2004.

-------.[1946],1995. *Anthem*. New York: New American Library.

-------, [1957],1992. *Atlas Shrugged*. New York: New American Library. アイン・ランド著，脇坂あゆみ訳『肩をすくめるアトラス』ビジネス社，2004.

-----.1964. *The Virtue of Selfishness: A New Concept of Egoism*. New York: New American Library. アイン・ランド著，藤森かよこ訳『利己主義という気概』ビジネス社，2008.

------.1967. *Capitalism: The Unknown Ideal*. New York: New American Library.

------.1981. “*The Age of Mediocrity*” delivered in Ford Hall Forum Lecture, April 26.（http://aynrandlexicon.com/ayn-rand-works/age-of-mediocrity.html）

Rossiter, Clinton.[1955],1982. *Conservatism in America.* Cambridge: Harvard University. クリントン・ロシター著，アメリカ研究振興会訳『アメリカの保守主義---伝統と革新との交錯』，有信堂，1964年.

Sciabarra, Chris Matthew. 1995. *Ayn Rand, the Russian Radical*. University Park: Pennsylvania State University Press.

Sunwall, Mark R. 2007. “Economics as a Branch of the Human Sciences: Albert Jay Nock’s Laws of Political Process”
『兵庫県立大学看護学部・地域ケア開発紀要』14号，17-35.

藤森かよこ.2001.「危険なフェミニストの冷戦ナラティヴ---アイン・ランドの『水源』」山下昇編著『冷戦とアメリカ文学---21世紀からの再検証』，世界思想社, 100-25.

----------.2008.「アイン・ランドの資本主義観:反ビジネス文学風土の中でビジネスマンを祝福した*Atlas Shrugged*」『桃山学院大学・人間科学論集』第35号，219-249.

----------2012.「アメリカにおける保守主義の誕生とアイン・ランドの交点」『都市経営』（福山市立大学）1号， 5-20.

----------2013a.「アイン・ランドの思想と『肩をすくめるアトラス』」『都市経営』（福山市立大学）2号， 113-28.

----------2013b.「衝動から思想へ---アメリカ保守主

義の誕生とハイエク『隷属への道』『都市経営』（福山市立大学）3号，9-26.
脇坂あゆみ.2010.「アイン・ランドの思想と作品」WePublish（電子ブック）.

＜リバータリアニズム関連＞
Barry, Norman P.1987. *On Classical Liberalism and Libertarianism.* New York: St. Martin's Press. 足立幸男訳『自由の正当性―古典的自由主義とリバタリアニズム』，木鐸社，2004.
Boaz, David. 1997. *Libertarianism: A Primer.* New York: The Free Press.副島隆彦訳『リバータリアニズム入門』，洋泉社，1998.
菅野淳.2013.『米国のリバタリアニズムと「新保守主義」』，志學社.
蔵研也.2007.『リバタリアン宣言』，朝日選書.
------ .2007.『国家は，いらない』，洋泉社.
副島隆彦.1999.『世界覇権国アメリカを動かす政治家と知識人たち』，講談社+α文庫.
仲正昌樹. 2008.『集中講義！アメリカ現代思想---リベラリズムの冒険』，NHKブックス.
藤森かよこ.2010a.「ジェンダー・フェミニストはリバータリアンでなければならない」『桃山学院大学・英米評論』第24号，115-136.
------ .2010b.「リバータリアン・フェミニストのすすめ―― ジェンダー理論の核心を生きるとは，普遍に自己を還元しないこと」東海ジェンダー研究所記念論集編集委員会編『越境するジェンダー研究』，明石書店，434-56.
森村進.2001.『自由はどこまで可能か--リバタリアニズム入門』，講談社現代新書.
------編著.2005.『リバタリアニズム読本』，勁草書房.
------編著.2009.『リバタリアニズムの多面体』，勁草書房.

Ayn Rand against American Conservatism

Kayoko FUJIMORI

Ayn Rand's break with conservatism was caused by the publication of *Atlas Shrugged* in 1957. She was ostracized from American conservatives'circle.

Ayn Rand's most specific attack on conservatism was developed in her essay, "Conservatism,an Obituary." Rand said as follows:The most crucial problem is that the conservatives do not stand for capitalism, because conservatives evade the conflict between capitalism and the morality of altruism; USA was founded on capitalism whose principle is that man has the inalienable rights to exist for his/her own sake, neither sacrificing himself/herself to others nor sacrificing others to himself/herself, and that men must deal with one another as traders by voluntary choice to mutual benefits; altruism holds that man has no right to exist for his/her own sake; self-sacrifice is his/her highest moral duty, virtue and value; the social systems based on altruism are socialism, fascism, Nazism,communism and statism, which immolate men for the benefit of the group, the tribe, the society and the state.

Ayn Rand believed that conservatives and she shared the political philosophy, Enlightenment thought, emphasizing reason and individualism, on which USA was based. But some conservatives defend capitalism on the ground of man's depravity. Because men are lack of rationality, no man may be entrusted with the responsibility. They say that a free society is the proper way of life for human beings as imperfect creatures. They deny the power of man's mind as his/her basic means of survival. They also desecrate Western civilization which was founded as the product of reason and rationality.

Ayn Rand also criticizes the worship of "tradition" of conservatives: some conservatives uphold the status quo, the given, regardless of whether it is good or bad, right or wrong, though USA was created by men who broke with all political traditions. Rand maintains that conservative obsession with the "Family" was a sort of tribalism; the Family is an institution that undercuts the individual's independence and autonomy.

Keywords : American conservatism, objectivism, capitalism, constructivism, statism